

## 報告

# ソーシャルワーク記録の課題

— PSW を対象とした調査からの示唆 —

Issues on social work records

— Report on practice of psychiatric social workers —

岩間 文雄

要約：PSW が作成する記録の分量、内容、他職種との共有状況について、精神科病院とその付属施設に勤務する PSW が5日間に作成した記録を対象に調査を実施した。その結果、PSW はケース記録を中心とした数種類の記録を継続的に作成していること、記録される項目の7割以上が100文字以下のごく短い文章で構成されている一方、アセスメントやプランニング、面接記録などでは長い文章で記録されること、記録の1/4が他職種と共有されていることなどが明らかになった。調査結果の考察から、PSW の記録作成に関し、記録すべき情報を取捨選択するスキルの育成、説明責任を果たす記録のあり方、他職種との記録共有方法といったテーマが今後の課題としてあげられた。

Key Words：ソーシャルワーク記録、PSW、共有

### I. はじめに

今日、施設の相談員、病院のソーシャルワーカーといった日本の社会福祉専門職にとっても、クライアントに関する記録の作成は業務と実践活動に深く組み込まれた営みである。

新しいモデルやアプローチ方法が開発され、制度や法律が変化しても、ソーシャルワーカーは援助対象の情報を収集し、情報を整理し、援助計画を立てる。その過程を援助チームのメンバーと共有し、サービスの内容を検討する。そして、実際に何をしたのか、どんな社会資源を活用したのか、その結果何がもたらされたのか、次の実践に向けて生かすことのできる教訓は何か、「記録」することで、実践の質を向上させる取り組みは不変である。

だが、実際に日本の社会福祉現場で、ソーシャルワーカーがどれだけの時間を割き、どのような内容の記録をつけ、どのように活用しているか、知ることも難しい。

本論では、兵庫県にある精神科病院とその併設施設に所属する精神科ソーシャルワーカー(以下、PSW と略す)に協力を依頼して実施した、記録の実態調査の結果を報告する。PSW が現場で作成する記録の分量、内容、他職

種との共有状況を明らかにすることを試みる。その考察から、ソーシャルワーク記録の課題について示唆を得ることができないか考察する。

### II. ソーシャルワーク記録の課題

ソーシャルワークの理論的枠組みが研究され、発展する今日までの歴史的過程において、「記録の作成」は常に重要なテーマであった。19世紀後半よりイギリスやアメリカで展開され、その個別援助活動がソーシャル・ケースワークのルーツとされる慈善組織協会では、訪問記録などの記録様式が整えられていた<sup>1)</sup>。また、リッチモンドといった伝統的なケースワークの研究者たちの著作でも、不可欠な要素として記録についての記録が見られる。記録は、ソーシャルワークの黎明期から、構造自体に組み込まれた重要な実践活動の一部であるといえる。しかし、研究対象として特に取り上げられる機会は多くなかった。

1985年、『ソーシャルワーク研究』誌において、ソーシャルワークと記録に関する特集が組まれた。このなかで、記録に関する文献を概観した論文において、久保は「ソーシャル・ワークの実践のなかで、記録を書くことは日常的になされているが、記録そのものについて意識的に考えられてきたことは、少なかったのではないら

うか。」と述べている(久保 1985: 4)。ソーシャルワーク記録は、研究対象としてはどちらかといえば不人気である状況についてのコメントである。記録の研究に関する中核的単行本で、当時入手できる主要な書籍として、久保の論文ではハミルトン、ティムズ、ケーグルらの著作を紹介している。これらの中で、最も直近に刊行され、またソーシャルワークの現代的テーマを網羅した著作としては、ケーグルの著作があげられる。『Social Work Records』は、Second Edition が最近邦訳された。

この本(Kagle 1991)では、アメリカの1978年から1983年、1987年から1988年の2回にわたるソーシャルワーク記録の全国調査の結果に触れられている。それによれば、記録に関する問題点として、①記録管理に活用できる時間が不十分、②記録に時間がかかる、③記録に対するワーカーの抵抗、④書記の援助が不十分、④保管のスペースの欠如、⑤記録が更新されない、⑥記録がお粗末、⑦財源と認定の報告が非現実的であること、であると紹介されている(Kagle = 2006: 19)<sup>2)</sup>。

ケーグルの書籍で指摘されたような課題の他、我が国では個人情報保護法の制定により社会的に注目の高まったプライバシー保護の問題、コンピュータ化と他職種間における記録共有の問題、ソーシャルワークのエンパワメント重視の指向を受けたクライアントへの情報開示など<sup>3)</sup>、記録にまつわる新しい切り口での課題に注目が集まっている。これら記録の諸課題を整理し、よりシンプルにカテゴリー分けを試みるなら、①記録作成の効率化、②記録内容の充実、③記録の実践への有効活用、④保管環境の整備、という四点に集約できよう。

こうした記録の諸課題について、考察を進める上で手がかりとなる、我が国のソーシャルワーク実践の現場での記録に関する調査データについても、豊富にあるとはいえない。日本のソーシャルワーカーは、実践活動において記録をどうとらえているのだろうか。そして、実際に記録をどれだけの分量、どのような内容とスタイルで作成しているのだろうか、という率直な疑問に対する十分な答えを得ることが難しい状況がある。

一つ目の問いに関する手がかりは、例えば日本精神保健福祉士会による『日本精神保健福祉士協会員に関する業務統計調査報告』(平成13年10月全国調査)から、ワーカーの記録に関する意識の一端として情報が得られる。この調査では、精神保健福祉士の業務実態と、業務に関する意識調査の結果が報告されている。その中で、精神保健福祉士の日常業務に関して「遂行」「重視」「自信」

の程度を調べている。それによれば、「情報処理(ケース記録、日報、月報、年報、統計の作成および情報管理)」業務は、回答者の80%以上が日常遂行している。これは個別援助活動における経済問題調整や家族問題調整等、ソーシャルワーク実践の主要な援助活動と同程度の頻度である。また、業務として重視する度合い、自信の高さについても非常に高い数値を示しており、精神保健福祉士はその業務において日常的に記録を作成し、その意義を重視し、また自らの記録をつけ管理するという業務遂行能力に自信を持っている様子がうかがえる。業務遂行の労力についても、個別援助、集団援助を除く関連業務において、最も時間数を割いて取り組んでいるのが「情報処理」であるという結果であったという(日本精神保健福祉士会医療福祉経済部業務検討委員会編 2004: 13-33)。多様な業務の中の一要素として情報処理を取り上げている調査であるので、記録についての詳細なデータは望むべくもない。また、PSWの業務に関する意識を調査するアンケートであるため、その結果が主観的な感想に留まるという限界もあるだろう。それでも、PSWの日常業務において記録が重要な要素であることを認識し、多くの時間を割いて情報処理に取り組んでいる現状が分かる。

二つ目の問いについては、先行文献において詳しくデータを提示している調査を見つけることができなかったため、独自で調査を企画した。ソーシャルワーク記録の課題を考える上で、基礎的な情報として現場での作成や活用の状況を把握することが不可欠であると考えたためである。

### III. 調査の概要

#### 1. 調査概要

PSWは、日常どんな内容を、どれだけの分量記録し、どの程度多職種と共有しているのかを知ることを目的に調査を企画した。平成19年7月、兵庫県内の精神科病院(約250床、精神科デイケア、精神障害者生活訓練施設、地域活動支援センター等を併設)に所属するPSWに調査を依頼した。概要を説明したうえで、PSW 8名の協力を得た。調査期間は、平成19年7～8月に、8名のPSWがフルタイムで勤務する連続した5日間をそれぞれ任意で選択してもらった。

調査期間に各自が作成した全ての記録を複写していただき、①匿名化：利用者の住所や氏名、勤務先などの個人情報については黒マジックで塗りつぶす処理、②多職種との共有状況の分類：作成した記録の複写を、表1に

表1 他職種との共有状況

A:主に、多職種チームの目に触れる記録（カルテへの記載など）
B:主に、同職種（精神保健福祉士）の目に触れる記録（ケース記録など）
C:その他、分類が難しい記録

示した3種類の内どれに該当するか判断してもらい、余白にA～Cを記入するという処理をしてもらった。なお、いわゆる「フェイスシート（インターク面接の際、記録が必要な基礎項目について項目がまとめられた定型書式）」については、PSWが日常業務において作成している頻度は高いと推定されたが、記入される情報はそのほとんどが個人情報であると思われる、匿名化の作業に大変労力を要し、分析も難しいと思われることから、複写の対象からは除外し、1日に作成した枚数のみを記録して報告してもらうこととした。

これらの処理後、1日ごとにまとめ、ラベルを添付して整理し各人で保存してもらい、調査終了後回収した。

## 2. 調査の内容

回収した記録は、大きく2種類に分類が可能であった。一つは、「定型書式」の記録である。これは、例えばチェックリスト形式のグループワーク記録や、書き込むべき内容があらかじめ細かく定められた書式の記録を指

す。これらについては、本調査では枚数のみを集計した。もう一つは、「自由記述式」の記録である。PSWが自由に記載する記録全般を指し、本調査で回収した記録の複写の多くがこのカテゴリーに分類される。自由記述式の記録は、①どんな種類の記録か（例えば「ケース記録」、「申し送り」等）、②幾つの項目（内容に関連性の高い一塊の記述を「項目」という単位で分類することとする）で構成されているか、③1項目は、何文字で記述されているか、④主にどのような内容が記述されているか、という枠組みで数量化し、集計した。その結果を分析することにより、記録の分量、記録の対象となった事柄、他のスタッフとの記録の共有状況を明確化するものである。

## IV. 調査結果

### 1. PSWが作成した記録の概要

8名のPSWが作成した記録の概要は、表2にまとめた。フェイスシートは、作成する日には1人につき1枚程度、多い日で4枚程度作成していた。デイケア所属のPSWは、グループワーク活動の定型のチェックシートを記入するため、定型記録の作成件数が多い。自由記述の記録については、日によって作成する分量にバラツキがあるようだ。31項目、3,900文字も記入する日があれば、自由記述の記録を作成しなかった日の例もある。しかし、調査期間内全般を見ると、作成しない日はまれで、毎日

表2 PSW 8名が5日間に作成した記録の概要

	PSW 属性	記録形式	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
No.1	A氏 所属：病院相談室	・フェイスシート ・定型記録 ・自由記述の記録	・・・ ・・・ 2種類4項目320文字	1枚 ・・・ 1種類5項目134文字	・・・ ・・・ 4種類10項目853文字	・・・ ・・・ 2種類4項目322文字	1枚 ・・・ 3種類5項目547文字
No.2	B氏 所属：病院相談室	・フェイスシート ・定型記録 ・自由記述の記録	・・・ ・・・ 2種類6項目890文字	・・・ ・・・ 1種類6項目202文字	・・・ ・・・ 1種類7項目299文字	・・・ 1枚 3種類11項目113文字	1枚 ・・・ 3種類7項目750文字
No.3	C氏 所属：病院相談室	・フェイスシート ・定型記録 ・自由記述の記録	・・・ ・・・ 3種類5項目542文字	・・・ ・・・ 1種類4項目237文字	1枚 ・・・ 3種類9項目689文字	2枚 ・・・ 1種類4項目150文字	・・・ ・・・ 2種類5項目427文字
No.4	D氏 所属：デイケア	・フェイスシート ・定型記録 ・自由記述の記録	3枚 34枚 1種類2項目128文字	・・・ 41枚 1種類11項目709文字	・・・ 39枚 1種類13項目890文字	・・・ 39枚 1種類8項目413文字	・・・ 34枚 1種類5項目375文字
No.5	E氏 所属：生活訓練施設	・フェイスシート ・定型記録 ・自由記述の記録	・・・ 1枚 3種類15項目319文字	・・・ 2枚 3種類22項目988文字	・・・ 1枚 3種類18項目158文字	・・・ ・・・ 3種類15項目759文字	・・・ ・・・ 3種類31項目900文字
No.6	F氏 所属：生活訓練施設	・フェイスシート ・定型記録 ・自由記述の記録	・・・ ・・・ 2種類8項目094文字	・・・ 4枚 3種類10項目806文字	・・・ ・・・ 3種類15項目808文字	・・・ 3枚 3種類6項目725文字	・・・ ・・・ 3種類13項目271文字
No.7	G氏 所属：地域活動支援センター	・フェイスシート ・定型記録 ・自由記述の記録	・・・ 1枚 1種類2項目130文字	1枚 2枚 1種類2項目021文字	・・・ 2枚 2種類14項目856文字	1枚 1枚 1種類1項目12文字	1枚 2枚 2種類9項目586文字
No.8	H氏 所属：地域活動支援センター	・フェイスシート ・定型記録 ・自由記述の記録	・・・ 1枚 2種類6項目209文字	・・・ ・・・ 1種類3項目160文字	・・・ ・・・ 1種類5項目359文字	1枚 ・・・ ・・・	・・・ ・・・ 2種類2項目856文字

いくらかの記録を各 PSW が継続的に作成している現状があるようである。PSW 8 名が 5 日間に記した自由記述式の記録は 34,007 文字、1 日平均にすれば約 850 文字、およそ 400 字詰め原稿用 2 枚強ということになる。

2. 自由記述式記録の種類

作成された記録の種類は、表 3 に示した。「ケース記録」が PSW の作成する主要な記録であった。調査への協力を得た機関では「ケース記録添付資料」という別添資料を作成していたので、これも併せれば記述された全項目の内、1/3 がケース記録に関連したものであることになる。次いで「PSW 業務日誌(業務関連の重要事項や、個別ケースに関する留意事項等を記載)」、「グループワーク記録(グループワークにおけるメンバーの発言や行動等を記載)」、「申し送り(スタッフ間で伝達すべき情報等を記載)」といった種類の記録が多かった。

表 3 記録の種類

記録の種類	項目数	全項目数 (335) に対する割合
ケース記録	78	23.28%
PSW 業務日誌	71	21.19%
グループワーク記録	39	11.64%
申し送りケース記録	39	11.64%
添付資料	33	9.85%
訪問看護記録	10	2.81%
相談記録	7	2.08%
来所者・相談件数	4	1.19%
施設日誌	4	1.19%
会議記録	3	0.89%

\*フェイスシート、定型記録はカウントせず。  
\*2 項目以下のものは省略した。

3. 自由記述式記録の分量

項目ごとの文字数を集計したものが、表 4 である。50 文字刻みに分類して分布を見ると、明らかな傾向が見てとれる。全体の 335 項目に対して、1 文字～50 文字の層が 158 項目 (47.16%) と半数近くを占めた。次いで、51～100 文字の層が 88 項目 (26.26%) で、7 割以上の記述が 100 文字以下という短い文であった。101 文字以上では、文字数が増えるごとに項目の数は漸減していく。ただし、501 文字以上の長い文で記載された記録は、12 項目 (3.58%) あった。

4. 自由記述式記録の多職種との共有

多職種との共有状況について、集計したものが表 5 である。「主に、他職種チームと共有する記録」に分類され

表 4 自由記述記録の、1 項目ごとの文字数

1 項目の文字数	項目数	全項目数 (335) に対する割合
1～50	158	47.16%
51～100	88	26.26%
101～150	31	9.25%
151～200	16	4.77%
201～250	10	2.98%
251～300	6	1.79%
301～350	5	1.49%
351～400	5	1.49%
401～450	2	0.59%
451～500	2	0.59%
501～	12	3.58%
合計	335	100.00%

\*フェイスシート、定型記録はカウントせず。

表 5 他職種との共有状況

記録共有の状況	項目数	全項目数 (335) に対する割合
A 主に、他職種チームと共有する記録	81	24.17%
B 主に、同職種 (PSW) チームと共有する記録	214	63.88%
C その他、分類不能の記録	40	11.94%
合計	335	100.00%

\*フェイスシート、定型記録はカウントせず。

る記録は 81 項目 (24.17%)、「主に、同職種 (PSW) チームと共有される記録」に分類される記録は 214 項目 (63.88%) であり、ソーシャルワーカー同士で共有する記録が、比較的多くを占めることが分かる。

5. 自由記述式記録の主な内容

記録の主な内容によって分類し、集計したものが表 6 である。内容的に関連の深い一連の記述を「項目」として分類したと既に述べたが、当然この一項目の中には幾つかの内容が混在しているものもある。ここでは、あくまで「主だった」内容によって分類した。

項目数でみると、「クライアントの生活に関する情報(クライアントの生活上の情報や、行動・発言に関して記載されたもの)」が 171 項目 (51.04%) と半数以上を占める。次いで「PSW の介入についての情報 (PSW の取った行動、発言に関して記載されたもの)」の 52 項目 (15.52%)、「クライアントの病状・治療に関する情報(クライアントの症状や、服薬等の受診情報に関して記載されたもの)」の 42 項目 (12.53%) となり、この三種類で 8 割弱を占める。項目数からみれば、PSW の記録はこれらの記述が大部分であるといえる。

表6 記録の主な内容

主な内容	項目数	対総項目数 割合 (%)	文字数	対総文字数 割合 (%)	1項目あたり 平均文字数
クライアントの生活に関する情報	171	51.04%	16,785	49.35%	98.1
PSWの介入についての情報	52	15.52%	2,845	8.36%	54.7
クライアントの病状・治療に関する情報	42	12.53%	3,190	9.38%	75.9
面接時の状況・相談内容	24	7.16%	4,358	12.81%	181.5
PSWの業務に関する情報	18	5.37%	629	1.84%	34.9
プランニング	7	2.08%	1,561	4.59%	223
クライアントの経過に関する情報	5	1.49%	1,596	4.69%	319
家族の情報	5	1.49%	304	0.89%	319.2
アセスメントに関する情報	4	1.19%	753	2.21%	188.2
会議の内容	3	0.89%	1,597	4.69%	532.3
その他	4	1.19%	389	1.14%	97.2
合計	335	100.00%	34,007	100.00%	平均：101.5

\*フェイスシート、定型記録はカウントせず。

ところが、1項目ごとの平均文字数に着目すると違った傾向が見えてくる。総記載文字数34,007文字を総項目数335項目で叙した1項目あたりの平均文字数は101.5文字であるが、項目数で上位であった3項目は、いずれも平均を下回っている。頻繁に記述される「クライアントの生活に関する情報」、「PSWの介入についての情報」、「クライアントの病状・治療に関する情報」は、比較的字数の少ない短い文で記述されていることが分かる。一方で、記述される頻度としては少ないが、「会議の内容」(平均532.3文字)、「家族の情報」(平均319.2文字)、「クライアントの経過に関する情報」(平均319文字)、「プランニング」(223文字)、「アセスメントに関する情報」(平均188.2文字)、「面接時の状況・相談内容」(平均181.5文字)等は、字数の多い文で記述されることが多いことがわかる。

## V. 考察

本調査は期間が短く規模が小さい。従って、専門職個人ごとの記録の位置づけの違い、部署による業務の違い、時期による繁忙の差など、おそらくPSWの記録に関係が深いであろう要因について、その影響を吟味する程のデータ量は入手できていない。また、少なくともこの調査で明らかになった記録の特徴が、ソーシャルワーク記録全般に向けて一般化できるものかどうかについても判断する材料がない。しかし、そうした制約は認識した上で、ソーシャルワークにおける記録技法を考えるにあたって、幾つかその特徴を捉えることができた。

まず、継続的に、数種類の記録を一定量作成し続ける日々の状況が見て取れる。多忙な中、これは非常に時間

と手間をとられる作業であることは、容易に想像できる。

作成する記録の種類は多いが、量的に記録作成において多くを占めるのは「ケース記録」であることがわかる。この事実は、自由記述式記録の多職種との共有状況にも影響していると考えられる。ソーシャルワーク固有の記録であり、病院相談室等に保管される「ケース記録」は、PSW間で共有することは円滑にできるが、日常的に多職種と共有してチームアプローチのデータベースとして活用するという活用方法は取りにくい保管方法がとられているのではない<sup>4)</sup>。その結果、作成する記録の6割以上がPSW同士で共有するものという結果につながっていると推測できる。しかし、一方で作成する記録の1/4程度は他職種と共有する記録であった。共有の仕方やチームアプローチ実践への活用方法など、記録を巡って日々その活用方法に関し検討を迫られているともいえる。

また、調査対象となったPSWが所属されているデイケアでは、日々のグループ活動における個別メンバーの状況をチェックリストで簡易に記録する定型書式を採用していた。過去の記録を分析し、比較的似通った記述内容の多い記録に関しては、こうした共通・定型の記録様式を開発し活用することにより、記録作成に注ぐ労力の削減と、PSWの経験年数や力量に関わらず一定レベルの記録内容を確保することが期待できる。共通の基本評価項目を備えた記録は、プログラムの効果測定にデータベースを供給する利点も期待できる。さらなる展開を検討する価値があるツールであろう。

項目ごとの文字数の集計結果は、興味深い。ソーシャルワーク記録といえば、社会福祉援助技術論のテキスト

で教えられている文体のバリエーション、5W 1 H<sup>5)</sup>の網羅、マッピング技法の併用などといった原則を参考とする限り、広範囲にわたる緻密な情報の収集・整理・分析が記録作成時の標準としてイメージされる。しかし、本調査で明確化されたのは、7割以上の記述が100文字以下のごく短い文章で構成されている事実である。しかし、この短い記述が多いという事実をもって、ソーシャルワーク記録は短文を旨としており、ライフモデルで取り扱われるようなクライアントの全体的把握を可能とする、生活に関連した多くの要素に関わる網羅的な内容を備えていないという結論に結びつけることにはならない。自由記述式の主な内容の集計と併せて考えれば、記録のほとんどを占める「クライアントの生活に関する情報」、 「PSWの介入についての情報」、 「クライアントの病状・治療に関する情報」は、確かに1項目の平均文字数が少ないものの、記入される項目数自体は圧倒的に多い。個々のケース記録には、日々のクライアントとの関わりやPSWによる介入、その反応などが、多忙な業務の合間を縫って短い文章により頻繁に書き込まれ蓄積されている。いわばジグソーパズルのピースであり、それらが集積され相互に関係付けられることによって、個別のケース像が形成されているといえる。そうした、クライアントの生活の詳細を把握するのに不可欠な細かな情報に関する短文記述も、ソーシャルワーク記録の欠かせない一部となっているのである。

その一方、比較的長い文章でじっくりと記述される記録の存在がある。会議の議事録、家族の情報、プランニング、アセスメントなどである。取り組む頻度は少ないが、幾つもの複雑な情報を関連付けて記述しなければいけないこうした内容については、PSWは集中して時間を使い、長くまとまった記録を作成しているといえよう。これもまた、ソーシャルワーク記録の大切な構成要素である。つまり、調査結果から見ればPSWの記録にはリアルタイムに、極めて短い文章を使い重要な内容を、適時記録していく技術と、まとまった時間を割いて複雑な記録対象について長い文章で記述する技術の両方が用いられていることになる。

また、内容の分析から分かることは、記録の大部分は事実の把握と保存にほとんどの労力が注がれているという事実である。精神障害者の生活支援を使命とするPSWは、当然クライアントの生活関連情報を蓄積していくことに関心がある。また、精神障害者は疾病と障害の並存がいわれるが、それゆえに「クライアントの病状・

治療に関する情報」も記録の中で大きな割合を占めた結果には頷ける。ソーシャルワーク記録は、第一に「クライアントの記録」であるといえよう。一方で、「PSWの介入についての情報」も多く記述されていた。集計をしながら内容を見ていく過程で、その記述についてもワーカーが実施したケア、行った介入に関する事実が淡々と記述されたものがほとんどであった。意外ではあったが、本調査を通じて、記録の中にワーカーの解釈や迷い、介入を判断に至った思考の過程などは、あまり記載されていないかった。

調査の結果を受け、先に示した記録の論点を分類するための4カテゴリーに沿って、ソーシャルワーク記録の現場レベルでの課題について整理したい。①記録作成をいかに効率化するかについて、PSWは日常業務において短文の記録を頻繁に記入しているという事実からすれば、略式表記や焦点を絞った簡潔な文章を作成する能力の養成も重要となろう。また、デイケアで用いられていたようなチェックリスト式の定型書式は、例えば種別の同じ複数の機関に所属するPSWが協働で開発し、異なる機関同士が共有してもかまわないものである。そうした定型書式の共同開発を目指した実験的研究なども、今後考えられよう。②記録内容を充実させる方法に関しては、記録する内容の吟味という問題が考えられる。記録される内容は、クライアントの生活、ワーカーの介入、クライアントの病状・治療に関する「事実」に集中していた。しかし、特に「PSWの介入についての情報」に関して一歩踏み込んで考えると、クライアントへの情報開示や訴訟への対応といった記録の現代的機能に照らし、これから文章の中に介入の根拠やワーカーの判断について記述することに意識的に力を注ぐことを求められる場面も出てくるのではないだろうか。どんな内容をどの程度記録することが、説明責任を果たす記録の作成につながるか、現状を踏まえた再検討が求められる。③記録の有効な実践への活用に関しては、蓄積された記録の活用がテーマとして考えられる。今回の調査結果から、PSWは日常的な短文での情報蓄積の一方、ケースの節目に面接記録やアセスメント、プランニングなどの形式でまとまった長文記録を作成していたことが分かる。この事実から推測すれば、日々蓄積された情報は有機的につながり合われ、生活の全体像を描写する統合的な記録の素材となるのだろう。とすれば、ワーカーには過去の記録を活用して深く広範囲にわたる総合的記録へと反映させる能力が必要とされる。それにより、集積された貴重な情報を、「単に

記録しただけ」ではなく、スーパービジョンやケースカンファレンスの資料として生かすことが可能になる。ソーシャルワーカーの養成過程においても、そうした蓄積された細かな情報を統合化し、重層的な現実の全体像を文章にて表現する記録作成能力の育成が課題として意識される。そして、④保管環境の整備については、情報化社会のネットワーク環境におけるプライバシー保護の問題である。調査でも、記録の1/4は既にチームで共有されていた。機関内でのネットワーク環境の構築により、今後記録の他職種との共有化が進んでいくことが予想される。情報流出への備えや情報管理体制の問題など、即時対応が必要である。

## VI. おわりに

これら調査から得られた現状についてのデータから、PSWの記録作成について、今後克服していく必要のある課題が見えてきた。それは、ソーシャルワーカー教育機関にとっては、不要な情報をスクリーニングし、重要な情報のみを簡略化して記録する能力、事実を正確に記述する能力、説明責任を果たす能力といった、実務においてPSWに要求される技術をいかに教育していくかという課題である。この問題は、さらに現任者訓練の記録に関するプログラム開発にも関係する。

また、現場のPSWにとっては、蓄積された記録の効果的な活用方法、情報を共有する体制の構築が、喫緊の課題として意識されるだろう。こうした手がかりをもとに、今後実践に役立つ記録の研究展開につなげていく必要があると考えている。

## 注

- 1) Timms, N. (1972) *Recording in Social Work*, Routledge & Kegan Paul. (=1989, 久保紘章・佐藤豊道・佐藤あや子訳『ソーシャル・ワークの記録』相川書房。)では、こうした慈善事業の記録について詳細な記述があり、記録の実例を示して説明がされている。資料として興味深い。
- 2) 引用した文章は、久保らによる翻訳『ソーシャルワーク記録』からの訳文である。
- 3) クライアントとの記録の共有については、例えば Shemming, D. (1991) *Client Access to Records: Participation in Social Work*. Avebury. (=1997, 小田兼三・福永英彦訳『参加と協働のソーシャルワーク — 社会福祉における情報と記録の共有化政策』相川書房。)がある。
- 4) 機関にもよるが、医療機関で作成される記録の代表例であるカルテは、精神科病院では病棟のスタッフルームに保管されている場合、物理的に常時PSWも含めた多職種の閲覧がしやすい状態にあるといえる。
- 5) 記録を作成する際、When いつ; Where どこで; Who 誰が; What 何を; Why なぜ; How どのように、といった基本情報を明確にするべきであるとされる。全般的な記録作成の原則である。

## 文献

- Kagle, J. D. (1991) *Social Work Records*. Waveland Press, Inc. (=2006, 久保紘章・佐藤豊道監訳『ソーシャルワーク記録』相川書房.)
- 久保紘章 (1985) 「ソーシャル・ワークにおける記録」『ソーシャルワーク研究』11 (2), 4-12.
- 日本精神保健福祉士会医療福祉経済部業務検討委員会編 (2004) 『日本精神保健福祉士協会に関する業務統計調査報告 (平成13年10月全国調査)』精神保健福祉通巻57号別冊。